

# 中国空軍 H-6K の増強

漢和防務評論 20180208(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国空軍は巡航ミサイルの母機として H-6K 爆撃機を増産しています。機体の形は TU-16 からのコピーですが、内部は近代化されています。エンジンもファンエンジンになり、航続距離も延伸しています。現在、外洋での作戦時には空中掩護なしに行動することができず、行動範囲が限られますが、本格的な空母が完成し海上での制空権が確保できれば、行動半径が延伸することになるかもしれません。

KDR 香港特電：

2017 年 11 月時点で、西安航空機会社は、新たなグループの H-6K を生産中である。少なくとも最近生産した 3 乃至 4 機の H-6K は未塗装であり、中国空軍は引き続き H-6K を装備するものと見られる。現在 2 つの説が航空工業会に流布している。1 つは、海軍が H-6K を装備し、大型化した YJ-12 等の対艦ミサイルを搭載する計画があるとの説であり、他の説は、空軍が空中給油装置、デジタル化したアビオニクス、フライバイワイヤーを導入した H-6K を求めているとの説、すなわち H-6K を改良しながら引き続き使うとする説である。

中国官方は、当然ながらコメントは拒否した。しかし推理すると、これらの説は、論理的には符合するところがある。戦略爆撃機としての H-6K に空中給油装置を取り付ける主目的は、滞空時間の延長であり、米軍のやり方に似ている。なぜなら、想定される戦争において、主な戦略飛行場は核攻撃を受ける可能性があるからである。

この他、現在、3 個爆撃機師団の H-6K の数を見ると、各師団は定数を満たしていない。3 つの師団の戦略爆撃能力のバランスをとるために、充足する必要があるのかもしれない。H-6K の主任務は、搭載する KD-20 型戦略巡航ミサイルによる戦略核攻撃及び通常弾頭による長距離精密爆撃である。中国空軍は、現在ロシア、米国に続き 3 番目の空中発射長距離巡航ミサイルを保有する国家になった。もしこの 3 個師団の H-6K が同時に類似の攻撃を行ったならば、一度に 360 発の巡航ミサイルを発射することができる。

西安航空機会社の生産状況を見ると、Y-20 の生産はゆっくりと進行中であり、少なくとも新しい Y-20 が 1 機、工場内部に出現した。

以上